

佐賀県オリジナルカンキツ 佐賀果試 35 号の品種特性と栽培管理 ②

佐賀県果樹試験場 常緑果樹研究担当 松元 篤史

◆ はじめに

「佐賀果試 35 号」は、大玉・高糖度・早期減酸を育種目標として品種開発に取り組み、平成 29 年 8 月 21 日に品種登録した佐賀県オリジナルカンキツです。

先月号では、「佐賀果試 35 号」の品種特性と開園から定植後の管理までを述べました。今月号は、「佐賀果試 35 号」の生育特性を踏まえ、生産樹における栽培管理の考え方について述べます。



収穫前の果実 (2019. 12. 27)

◆ 生産樹での栽培管理

1、生育ステージ

無加温栽培、露地栽培における生育ステージについて、表 1 に示しています。成熟期は無加温栽培で 1 月中旬頃、露地栽培で 1 月下旬頃となります。

「佐賀果試 35 号」は、結実を開始すると、枝が短くなり樹冠の拡大が緩慢になるなど、樹勢が弱化しやすい傾向にあります。そのため、適正着果や肥培管理などに十分に配慮し、樹勢を適正に維持することが重要です。

2、整枝・剪定

樹形は開心自然形を基本とします。幼木時から発芽数が多いため、樹姿は開張しやすく、結実を開始すると枝は下垂します。そのため、主枝は立ち気味に仕立て、亜主枝の間隔を広くしておくことが良いと考えられます。

結実を開始すると、枝が短くなり樹冠の拡大が緩慢になる傾向にあります。また、短い春枝には着花が少なく、そのほとんどが落果します。そのため、剪定は着花・果と新梢のバランスを適正に保つことに重点をおきます。

着花が多いと予想される場合は、切り返し剪定を中心とし、短い春枝を整理して着花量の制限と新梢の確保に努めます。また、着花が少ないと予想される場合には、着花を確認した後、結実促進のための新梢整理も兼ねて軽い間引き剪定を行います。また、夏枝等にトゲが発生した場合には早めに除去するようにします。

3、摘果

本品種の果実特性やカンキツとしての商品性を考えると、生産目標としての果実階級は 2 L～3 L が主体と考えられます。無加温栽培では、収穫時に 2 L～3 L に到達するための果実サイズは、6 月下旬で 35

表 1 作型における生育ステージ

	発芽期	開花期	着色始め	完全着色期	成熟期
無加温栽培	3 月上旬	4 月下旬	10 月中旬	12 月中旬	1 月中旬
露地栽培	3 月下旬	5 月中旬	10 月下旬	1 月上旬	1 月下旬

mm～40 mm程度が必要となることから、このサイズを目安に摘果を行います。葉果は、80 を基準とし、樹勢によって調整します（図1）。

4、水分管理

本格的な糖度の上昇は、10月中旬以降であり、減酸量は8月～10月頃まで比較的多いものの、その後は緩慢となります。そのため、夏場は盛夏期を中心に定期的なかん水により土壌水分を保持し、細根の維持に努めます。また、極端なかん水は裂果を助長しますので注意が必要です。無加温栽培における栽培管理について表2に示しています。かん水の量や間隔は園地の状況に応じて調整する必要があります。

5、施肥

樹体栄養としては、他のカンキツと比較し落葉が多く、特に秋季以降に葉が黄化して内側に巻く症状が見られることから、弱い傾向にあると言えます。従って、樹体栄養を適正に維持しながら隔年結果を是正し、大玉果生産を行うためにも年間を通して肥効を維持するような施肥体系が必要で

す。施肥量および施肥配分の日安は、表2および表3に示しています。成木における施肥量は、窒素成分で35 kg/10a程度と考えられますが、実際の収量に応じて増減します。

6、葉面散布

発芽・開花期に、芽かきの実施とともに窒素等の葉面散布を行い、新梢の充実を図ることは、結実促進や樹勢の維持、良好な結果母枝の確保のために必要と思われます。

また、近年は、日焼け果、浮皮果や収穫時期の水腐れ果の発生、さらには貯蔵中のこはん症や腐敗果の発生など果皮障害が目立つようになってきました。「佐賀果試35号」は貯蔵性に優れており、貯蔵中の腐敗果やこはん症の発生は少ないですが、水溶性カルシウム剤の葉面散布により果実体質の強化を図ることは重要と言えます。散布時期は、果皮の細胞の分裂期から肥大初期のころが吸収の盛んになる時期と考えられ、1次生理落果が終了する頃からとなります。回数は、10～14日間隔で最低でも3回以上は散布してください。

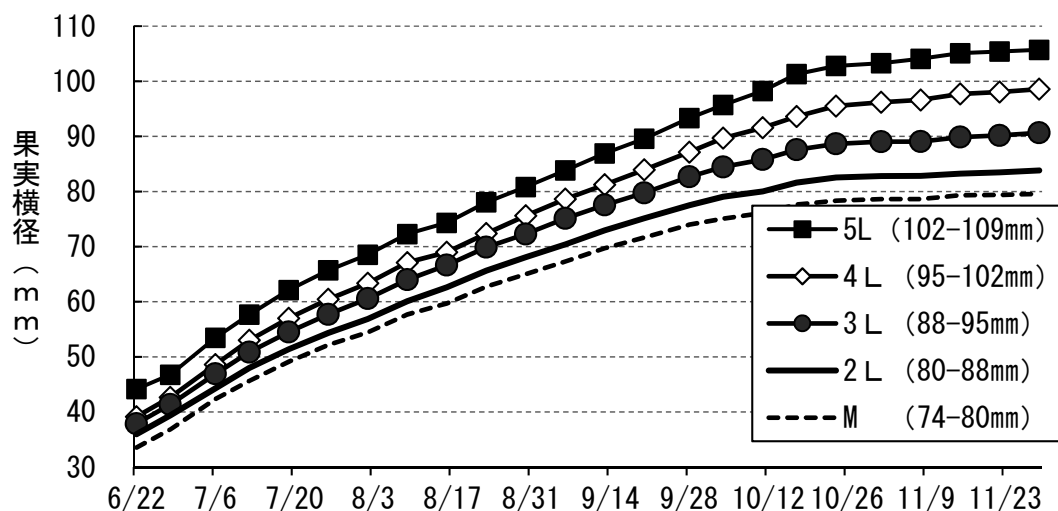


図1 収穫時の果実階級と果実横径の推移（2017）

表2 無加温栽培（周年被覆）における生育ステージと栽培管理

		無加温栽培（周年被覆）					
		生 態	品 質	水管理	一般管理		
2月	上旬			充分量	サイド被覆	土作り	
	中旬				整枝・剪定	春肥（35%）	
	下旬					葉面散布 （N、Ca等）	
3月	上旬	発芽			芽かき		
	中旬						
	下旬						
4月	上旬			節水	※換気に注意	（N、Mg等）	
	中旬						
	下旬	開花期					
5月	上旬			10mm 7-10日 間隔	遅れ花除去	夏肥（25%）	
	中旬	1次落果					
	下旬						
6月	上旬	2次落果			粗摘果 サイド開放 仕上げ摘果 枝つり トゲ除去	水溶性カルシウム 剤の葉面散布 （3回以上）	
	中旬						
	下旬						
7月	上旬	果径 40 mm		玉つり	初秋肥（20%）		
	中旬						
	下旬						
8月	上旬	果径 55 mm	糖度 8.5	5 mm 3-5日 間隔			
	中旬		酸度 4.5%				
	下旬						
9月	上旬	果径 65 mm	糖度 9.0				
	中旬		酸度 3.0%				
	下旬						
10月	上旬	果径 75 mm	糖度 9.5				
	中旬	着色始期	酸度 2.0%				
	下旬						
11月	上旬		糖度 11.0	3 mm 3-5日 間隔			
	中旬	果径 85 mm	酸度 1.5%				
	下旬						
12月	上旬		糖度 12.5				
	中旬	完全着色	酸度 1.2%				
	下旬						
1月	上旬			水切り	収 穫		
	中旬	成熟期	糖度 13.0	充分量			
	下旬		酸度 1.0%			葉面散布（N主体）	

表3 目標収量と施肥量 (成分量kg/10a)

目標収量	窒素	リン酸	カリ
2 t	28	20	22
3 t	31	22	25
4 t	35	25	28
5 t	40	28	32

表4 予措・貯蔵条件の目安

作型	収穫時期	貯蔵区分	予措程度 (減量%)	貯蔵条件		備考
				温度 (℃)	湿度 (%)	
無加温 栽培	1月上旬 ～1月中旬	短期 (～3月上)	自然予措	常温	85	タイベック 貯蔵
露地 栽培	12月下旬 ～1月下旬	短期 (～3月中)	自然予措	常温	85～90	タイベック 貯蔵
		長期 (4月以降)	2	8		Pプラス等

7、貯蔵

表4に予措・貯蔵条件の目安を示しています。基本的には強い予措は必要としません。長期貯蔵する場合には、果皮の水分を軽く取り去る程度行います。3月中旬頃までであれば、常温での貯蔵は可能です。

貯蔵管理のポイントは、安定した温湿度を維持し、過乾燥や結露を防止することです。貯蔵庫内の温湿度分布は、処理する貯蔵庫の大きさや保温性、さらには入庫する果実の量によって変わってきます。事前に貯蔵環境を確認し、最適な温湿度条件が維持できない場合には、入庫量の調整や換気による空調管理、保温資材の導入等による保温・湿度維持対策を講じる必要があります。タイベックでコンテナを包装すると、コンテナ内の湿度を80%～90%で維持す

ることができ、果皮のしなびやへた枯れが抑えられるとともに品質向上効果が期待されますので活用してください。

◆ おわりに

「佐賀果試35号」の特性を最大限に活かし、安定した品質や収量を確保するためには、健全な樹勢を維持することが大切です。水管理や肥培管理など、きめ細やかな対応をお願いします。市場へのデビューは、令和3年春を計画しています。中晩柑類は、流通する期間が年内から初夏までと幅広く、種類も多様で各都道府県において育成されたオリジナル品種も多く見られます。消費地に本品種の魅力を最大限にPRできるように、JAなどの関係機関や市場、流通業者との関係を密にして宣伝活動や販売戦略を進めていきます。